

心の箍

能村 研三

鳩亭の由来

最近「沖」に入会された方から、「鳩亭」の由来について知りたいというお便りがあった。

この「鳩亭」について先師登四郎が、随筆集『鳩の手帖』の中で「鳩亭由来」という一文の中で書き綴っている。これは昭和五十二年三月号の「沖」の五百字随想に書いたものである。

鳩は私のもっとも好きな水鳥で、冬になると必ず一、二句は鳩の句を作っているのと、葛飾の枕詞が「にほどりの」だからである。

にほどりの葛飾早稲を饗すとも
この哀しきを戸に立てめやも

万葉集卷十五東歌

という葛飾少女の素朴で情熱的な恋歌がある。そこで、月並な葛飾の代りに枕詞から取って鳩亭と名付けることにした。

『鳩の手帖』

先師登四郎は生涯俳句の雅号を持つことなく、本名で俳句を作り続けた。これは作家である自分と生の自

憎めない鬼ばかりゐて豆を打つ
東京に降る雪本気などはなし

春浅し屏風だたみの予定表

料峭や岬の分つ海の色

並走の電車離るる春めけり

ゆるびたる心の箍や薄氷

オカリナは土の音色や山笑ふ

屑籠に外れし反故や春愁

分とが作品を境にして違う人間にな

ってしまふのを恐れているからであつた。「沖」が創刊される前には、句集の序文を頼まれた時に「葛飾書屋」という言葉を使っていたこともあつた。登四郎は還暦を過ぎ、時には遊びの気分でリラックスして作る俳句があつてもよいという思いから庵号を名乗ることになった。

これにあやかつて、私の第一句集『騎士』や林翔先生の初めて評論集『新しきもの・伝統』の二冊の本を出版するにあたり自主的な出版社である「鳩書房」を立ち上げたのもこの頃であつた。

また、市川の老舗の和菓子店であつた「島村」から、登四郎に新作和菓子の名前を頼まれた時も「鳩」にほどり」という名前をつけたこともあつた。

現在も登四郎の書斎であつた部屋は客間として使っており、登四郎がこよなく愛した庭の木々も育っている。「沖」のホームページでも「鳩亭だより」というコーナーを設けて、随時発信している。

能村 研三